

## 家康の家臣教育法

今は上司受難の時代だそうですね。ある支店長が、部下を叱責したら、その部下が本社のパワハラ相談室に電話して、逆に支店長のほうが飛ばされた・・・という話もあるとか。じゃあそんなこと言ったら、部下の機嫌を取るばかりで叱らなくていいのか？という声が聞こえてきそうですが、この点でもっとも参考になるのは徳川家康の家臣教育法でしょう。

家康という人は、部下に指示を与えるとき、始めはハキハキと話していたのが、途中から怪しくなってきた、最後は口の奥の方でモゴモコとなるんだそうですね。家臣が「すみません。最後の方がよくわからなかったので、もう一回、お願いします」と言うと、「おお、そうか」と言って、再び話し始めたら、また、途中から怪しくなってきた、やっぱり最後は口の奥でモゴモゴ・・・と。いつの時代もそうですが、上司相手にそう何度も聞き返せるものではないですよ。家臣も仕方ないから、「はあ」と言って、後は自分なりに解釈して行動に移していたが、それで特に何も言われなかったので、ずっと、そうしていたと。

これすなわち、家康は物事を明確に指示しないことで、家臣自らに考えさせようとしたんですね。当時は今と違って通信設備などありませんから、使いに出た家臣もとっさの判断が求められることがあったわけで。（事実、私の友人の東京の町工場の社長は、福岡にいたときに社員から「エレベーターに閉じ込められました。どうしましょう？」という電話がありました。すべての思考を社長に委ねていると、現代でもこういうことが起こるといって好例かと。）

ただし、ここで大事なことがあります。それが、「意図したところと違って怒らない」ということ。中には、家康の意図と違ってしまったケースもあったはずなんです。しかし、家康はそういう場合でも、おそらく、素知らぬ顔で何も言わず我慢していたのでしょう。怒ってしまうと部下は恐ろしくて、以後はもう自己判断できなくなってしまい、過度にそういうことが続けばノイローゼだ、逆恨みだってことにもなりますよ。

よく、徳川家臣団のことを「忠誠無比の三河武士団」と言いますが、それは多分に結果論であって（事実、家康の祖父は家臣に殺されています。）、つまりは、こういう家康の辛抱強い家臣教育あってのことだったと。

ちなみに、清水次郎長という人は、子分を叱るとき、誰もいないときを選んで叱ったとか。一寸の虫にも五分の魂で、どんなチンピラでもプライドというものがあつたわけで。逆に、私の知り合いには、同じ失敗を繰り返さないように本人のために皆の前で叱る・・・という人もいましたが、立派なことと言っても叱る側の自己満足が見えてきましたよ。

（小説家 池田平太郎）

## 桃太郎に見る部下のモチベーションの上げ方

昔話『桃太郎』は日本人なら誰でも知っている昔話です。桃から生まれた桃太郎が、犬・猿・雉のお供を連れて鬼退治。私たちが知っているこの形になったのは、明治時代だといわれています。国威発揚のために勇ましい物語になったとのこと。それ以前もさほど大きな違いもなく、勧善懲悪の物語として庶民に親しまれていました。

さて、この『桃太郎』、実は部下のモチベーションを上げるための要素が盛り込まれたものなのです。桃太郎は犬・猿・雉といった様々なタイプのお供を束ねていますよね。実際に部下を持ったことがある人なら、様々なタイプの部下を束ねるのは難しいとご存じでしょう。では、どうやって桃太郎はタイプの違うお供を導いていったのでしょうか。

その方法とは、犬・猿・雉を「正義の味方」にすることです。鬼退治は平和な生活を送る上で排除すべきもの。排除は虐げられている人たちにとって「正義」なのです。この「正義」という使命を犬・猿・雉に与えることで、桃太郎はタイプの違うお供をまとめていきました。

人間は正解を求めて成長を続ける生き物。これは生物全般にもいえることです。不正解だった場合、野生動物なら「死」が待っていますから当たり前といえるでしょう。正解の中でも「正義」は大きな快楽を与えるものでもあります。自分という人間に圧倒的な正当性を与えるので、オドオドと怯える必要がなくなるからです。

正義を与えられた犬・猿・雉は勇敢に鬼と戦い、ついに打ち勝ちました。これがもし、きびだんごという報酬のみでしたら、ここまでの働きはできなかったでしょう。やはり、自分は「正義の味方」であるという自負が、ここまで勇敢になれた所以でしょう。

これを現代に応用するには、部下に「正義の味方」になるための理由を伝える。例えば、下着メーカーであるなら、下着で世の女性の体形を美しくする。これが会社にとっての「正義」です。そして、これを世に伝えることが「正義の味方」になるために必要なこと。このように会社の正義を伝えるようにすれば、様々なタイプの部下であっても束ねていくことが可能です。

実はコレ、モチテクにも応用できるんですよ。自分と付き合うことが「正義」だと相手に暗に伝えることで、人が集まってくるのです。ただし、これはよく考えて実行してくださいね。失敗すると、あなたの恋はどんぶりこと川下に流れていくでしょう。（コラムニスト ふじかわ陽子）

## 免疫力を上げなければ

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う外出自粛期限の前日にはあるが、長期間のステイホームでストレスが貯まり、免疫力も落ちている可能性があることから、これらを解消するためにも役立つとし、5月5日のこどもの日の行事として、我が自治会では年初の予定どおり、ナコウ山ハイキングを挙行した。

午前9時に、集合。子供7人、後期高齢者3人を含む18人が参加、白波台側の登山口からスタート。途中、白波台の水源地水塔を経て、離山に登る。この山の頂には昔、白波台自治会の総力を結集して立てたテレビアンテナの痕跡がある。通常のアンテナでは電波を拾えない時代、山頂にアンテナを立て、ケーブルを敷設し、各戸に配線した名残を発見、町内の先輩達の団結力と実行力に感嘆した。

ナコウ山の山頂近くにある石丁場跡（ここで切り出した石は、回路で東京まで運ばれ、江戸城の石垣に使われた）の広場で昼食。ここからの宇佐美の海、山、街の眺望は、苦心して山を登ってきた者だけが味わえる絶景だ。

芽吹いた草木の名前や特徴を、町内の最長老で花や木に造詣が深いKさんの説明を聞きながらのハイキング。

免疫力を増すとされるフィトンチッドを大量に含んだ薫風を受け、ビタミンDを増進するという太陽の光を受けながら英気を養う。

下山途中、昔、峠にあったという大島茶屋（とはいっても、今は小さな石碑が残っているだけだが）跡で踵を返し、学園側の道へと下る。途中、法界萬霊塔の横に立てかけてある卒塔婆を発見。記された日付は4月15日、新型コロナウイルス感染症の伝播を阻止する祈念の文字が書かれてある。文面からすると市内のお寺さんが立て掛けたようだ。＜法界萬霊塔＝昔、村境や峠に悪霊や災難が村に入らないように祀られたもので、文化13年（1816年）に建てられた。伊東市内に3箇所ある内の一つで、ここの法界萬霊塔が最も大きい＞

さらに下ると「吉田松陰先生腰掛の平石」がある、ここに腰掛けると将来、立派な人になれるということ、子らは競って腰を掛ける。

今回のハイキングに際して、若手のK副会長が古いナコウ山地図を探し出してコピーし、参加者に配布、小生からは「フィトンチッド」の説明を織り込んだ「薫風の5月」と題したコラムを印刷したペーパーを配布した。例年、こどもの日には我が自治会では図書カードを配って読書を奨励してきたが、今年はその配布は無い代わりに、「FACTFULNESS(ファクトフルネス)」と「シン・ニホン」の2冊を子らが読むべき優良図書として推奨した。自分の頭で考え、行動できる大人に育ってもらいたいという期待を込めて。

（ジャーナリスト 井上勝彦）

広告